

日本科学者会議
福岡支部ニュース
No. 255
2019年4月24日発行

●日本科学者会議事務局

〒113-0034 東京都文京区湯島 1-9-15
Tel: (03) 3812-1472

●福岡支部事務局

〒819-0395 福岡市西区元岡 744
九州大学・基幹教育院
小早川義尚 気付け
<TEL> 092-802-6014
<E-mail> fukuoka@jsa-fukuoka.sakura.ne.jp
<郵便振替> 福岡 01790-1-5576
<支部HP> <http://jsa-fukuoka.sakura.ne.jp/index.html>

目次

ページ

1	日本科学者会議福岡支部第49回定期大会(5月12日)の案内	1
2	福岡支部講演会(5月12日 講師:本庄春雄氏)の案内 「グローバル化された国際競争下での我が国の大学の在り方」	2
3	本年の原水爆禁止世界大会・科学者集会は福岡で開催します	2
4	「九大憲法カフェ」第一回集い(3/13)の報告	3
5	福岡核問題研究会(2/23, 3/30)の報告	3
6	例会等の案内	4
6-1	福岡核問題研究会4月例会(4月27日) 「原子炉級プルトニウムと核兵器」	
6-2	『日本の科学者』5月号 読書会(5月13日) 「特集:測るを極める」	
6-3	『日本の科学者』6月号 読書会(6月10日) 「特集:18歳選挙権と「主権者教育」の諸問題」	

1. 日本科学者会議福岡支部第49回定期大会の案内

日本科学者会議福岡支部第49回定期大会を下記の通り開催します。定期大会終了後は、例年通り講演会を開催します。会員の皆様のご出席・参加をお願いします。

欠席される場合は下の委任状(e-mailでの送付可)を提出してください。なお、例年通り、委任状を出されずに欠席された場合は、議決権を議長に委任したものと見なします。

記

日時: 2019年5月12日(日) 14:00~15:00 (開場 13:30)

場所: 大丸エルガーラ 6F 久留米大学・福岡サテライト (国体道路側入口より)

議事: 2018年度支部活動報告
2018年度支部会計報告
2019年度支部活動計画
2019年度支部予算案



-----委任状-----

私、日本科学者会議福岡支部会員（ ）は、第49回定期大会における議決権を（ ）に委任します。

2019年 月 日

(代理人の記入がない場合は議長委任となります。)

2. 福岡支部講演会の案内

日本科学者会議福岡支部講演会

日時： 5月12日（日）15:30～17:00

会場： 久留米大学福岡サテライト・天神エルガーラオフィス6階

講演題目：「グローバル化された国際競争下での我が国の大学の在り方」

講師： 本庄 春雄 氏（九州大学名誉教授）

講演要旨：

2004年の国立大学法人化から15年が経ち、大学は予算や大学自治・運営でますます厳しい環境に置かれている。情報の最先端国家が世界の覇権国家になるという社会の急速なAI化やビッグデータ依存化が進行していく中で、国の経済力と大学の国際競争力が密接な関係で議論されている。大学の国家主義的視点である。一方で、世界中にネット公開している講義が数百にも及ぶ大学もある。ユネスコの高等教育宣言にもあるように、大学は人類全体の知の継承と発展、あるいは、人類全体の平和や福祉に貢献する人物の育成にその使命がある。大学の普遍的視点である。高等教育政策を考えるときにはその両視点が要るが、市民と共に国公私立大学の在り方を考える大学フォーラムという全国的組織が有志によってこの3月に作られた。講演では、そのような国内外の状況を踏まえ、日本の高等教育の在り方を考えたい。

3. 本年の原水爆禁止世界大会・科学者集会は福岡で開催します

3月末にJSA本部の「科学者集会」担当者から、本年の科学者集会在福岡で行なうことはできないかという打診を受け、4月8日の支部幹事会で慎重に検討した結果、福岡支部として同集会の開催を支援していくことを決めました。ただこれまでの慣例で、科学者集会是実行委員会形式で行うことにあるので、幹事全員が実行委員として集會をサポートしていくことにしました。

第一回実行委員会が4月13日に開催され、科学者集會の会場、日程、テーマおよび講演者候補が議論され、実行委員会の補強についても意見が出されました。その実行委員会で決められた事項は以下の通りです。

- (1) 春日クローバープラザ（〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1-7）のセミナールーム（定員120名）を会場とする。
- (2) 集會の日程は、7月28日（日）とする。時間は、9:00～17:00。
- (3) 集會のメインテーマを、「九州・沖縄から東アジアの平和をどう構築するか」とする。
- (4) メインテーマに関連して、相応しい講演者の候補が数名あげ、次の第二回実行委員会までに依頼する。
- (5) 沖縄、佐賀、山口などからの報告や核兵器の技術的問題についての報告も加える。
- (6) 実行委員会の補強するため、平和委員会、被団協、婦人団体などに働きかける。
- (7) 科学者集會としての「アピール」を発表し、公表する。
- (8) 第二回実行委員会を5月12日（日）午前10時より久留米大学福岡サテライトで行う。
(報告者：三好永作)

4. 「九大憲法カフェ」第一回集い（3月13日）の報告

皆さんご存じの通り、大学の今と明日を考えるための議論を持続的に行なうための場として、「大学の危機をのりこえ、明日を拓くフォーラム（大学フォーラム）」が設立されました。このフォーラムの立ち上げには JSA 福岡支部の会員でもある九州大学の総合理工学研究院の本庄教授も加わっています。JSA 福岡支部の会員を中心とした九州大学の教員有志が、この運動に呼応するという意味も含めて九州大学に於いて「九大憲法カフェ（仮称）」を立ち上げようと3月13日（水）に「九大憲法カフェ（仮称）」第1回の集いを開催しました。年度末の多忙な時期の開催ということもあり、残念ながら参加者は10人に満たないさみしいものとなりました。

集いでは、本庄教授が「『大学の危機をのりこえ、明日を拓くフォーラム』の立ち上げと九州大学の抱える問題」と題して話題提供をおこない、それを基に国立大学の法人化以降の様々な状況について参加者を加えて論議を行いました。提供話題の要旨は次の通りです。

要旨：国公立大学をめぐる情勢、特に予算の締め付けが厳しく、国立大学の厳しい予算の現状を国大協会長（京大総長）のプレゼン資料から紹介した。一方で、国の高等教育政策を財務省主計局次長の講演資料から観た。国は必要な予算を大学に投入しているにもかかわらず、大学側が十分な成果を出していないと認識している。両者の対立した溝は埋まることはない。一般市民にも国公立大学の現状を理解してもらい、共に大学のあるべき姿を考えるため、大学フォーラムという全国的組織が3月に発足したのでそれを紹介した。高等級育政策は大学関係者、国、経済界だけではなく市民と共に考える事が大切である。

今後は、大学・研究・高等教育の問題だけに限らず、民主主義・平和・人権などに関する今日的な課題、例えば、国の民主的運営土台を蝕むような「公文書の改ざんや廃棄」、「国の基本統計調査の在り方」等の問題、東アジアの平和に関する問題、といったことについても九大の教員・学生の間で議論・意見交換・意志表明などを行うことができると考えています。この「九大憲法カフェ」のとりくみを継続的に続けて行くためにはどうするかという相談も行い、まずは、ホームページ(ブログ)を立ち上げて、そこを足がかりに九大の教職員に情報を発信して行こうと現在その準備を始めています。

（報告者：小早川義尚）

5. 福岡核問題研究会の報告

福岡核問題研究会は、この間、下記の2月と3月に例会を行った。

2月例会

日時：2019年2月23日（土）10:00～12:30

話題：（1）公開質問書に対する九州電力回答と応答の評価検討
（2）「複雑系・社会物理から観た政権支持率とその意味」（話題提供：本庄春雄氏）

3月例会

日時：2019年3月30日（土）10:00～12:30

話題：（1）「高温溶融炉心の挙動とコアキャッチャーの必要性」（話題提供：中西正之氏）
（2）「早野・宮崎論文の伊達市の被曝線量低評価の問題点」（話題提供：森永徹氏）
（3）公開質問書に対する九州電力回答の評価文章の検討

2月例会では、まずはじめにわれわれが提出した公開質問書に対する九州電力の回答についての評価をどのような点から論ずるかの検討が行われた。質問事項：①原発の審査基準について、②過酷事故時の住民避難等の対策について、③過酷事故時の水蒸気爆発リスク対策について、④再臨界の可能性について、⑤通常運転時の健康被害について、⑥破壊行為から原発等を守る対策について、⑦基準地震動の設定値について、⑧玄海原発の「立地の適・不適」について、⑨世代間倫理に反する行為について、⑩原発再稼働の民主的手続きについて、のそれぞれの論点を整理して、次の3月の例会までに文章化することとした。

次に、本庄氏から政権支持率の変動は、株価の変動などと同様にフラクタルであり、複雑系科学や社会物理学の対象として研究しているという興味深い報告があった。フラクタルとは、マンデルブロ集合が有名であるが、例えば雲の外形について、その外形の部分と全体が再帰的に自己相似になっているものをいう。

3月例会では、はじめに、中西氏により「高温熔融炉心の挙動とコアキャッチャーの必要性」という報告がなされた。1979年のスリーマイル島および1986年のチェルノブイリで起きた過酷事故以来、世界的には過酷事故が起きた場合、その緩和対策が重視されるようになった。チェルノブイリ原発の圧力容器下部には圧力制御のための巨大な地下プールがあり、熔融炉心はそのプールに落下することで水蒸気爆発が起き、プルトニウムを含む微粉末（プルトニウムダスト）が全世界に飛び散る危険があったという。幸いにも3名の決死隊が潜水してバルブを開け排水することでそのような事態は回避できたというが、3名の尊い命が犠牲となった。このことから、熔融炉心を水と分離して受け止めるコアキャッチャーが考えられるようになった。熔融炉心を圧力容器内で保持するIVR（ウェスチンハウス社）や容器外で保持するEVR（アレバ社）の他に、ロシアのるつぼ型コアキャッチャーがあるという。このコアキャッチャーには、水蒸気爆発対策だけでなく、水素発生防止や再臨界防止、熔融炉心コンクリート反応（MCCI）防止の対策も行われているという。いま再稼働されている日本の原発は、このようなコアキャッチャーが備えられているわけでもなく、MCCI防止対策として熔融炉心を水で張った格納容器に受けて冷却するという事故対策が許されている。

次に、森永氏により「宮崎・早野論文の伊達市の被曝線量低評価の問題点」として、いまネット上や一般週刊雑誌上でもホットな話題となっている宮崎・早野論文の問題点が紹介された。宮崎・早野両氏は、"Individual external dose monitoring of all citizens of Date City by passive dosimeter 5 to 51 months after the Fukushima NPP accident"というタイトルの連続の論文を2016年と2017年にJournal of Radiological Protectionという英文誌に発表している。その論文は、結果として市民が受けた被ばく線量をひどく過小評価するものになっているという。一つには、市民がガラスバッジを正しく装着していないために起こる線量の過小評価を無視しており、次に、飛行機で測られた空間線量と地上での測定値の差を考慮しておらず、さらに、多方向から来る放射線によるガラスバッジの測定線量を、実効線量とみなしていることなどの問題がある。また、バックグラウンドとして0.54 mSv/年を一律に差し引いていることも問題であるという。これらの被ばく線量の過小評価により、「現在、伊達市で空間線量が高い地域でも、生涯の被曝量もたいしたことはない」とか「除染しても被曝量はさして減らない」とまで言っているという。

最後に、時間が無くなったため公開質問書に対する九州電力の回答に対する批判についての文章の検討は、メーリングリストを通しての意見交換で行うこととした。

（報告者：三好永作）

6. 例会等の案内

6-1 福岡核問題研究会 4月例会

日時：2019年4月27日（土）10:00～12:30
場所：九州大学筑紫キャンパス総合研究棟 C-CUBE 5階 511室
話題：「原子炉級プルトニウムと核兵器」（話題提供：岡本良治氏）
内容：原子炉級Puを信頼性の高い核兵器に使えるかどうかについて最近の注目すべき文献(*)の要点と日本保有Puについての論評を紹介し、コメントする。

(*)Greg Jones,

Reactor-Grade Plutonium and Nuclear Weapons: Exploding the Myths, February 20, 2018.

Nonproliferation Policy Education Center.

<http://www.npolicy.org/thebook.php?bid=37>

6-2 『日本の科学者』 5月号 読書会

日時：2019年5月13日（月）14:00～17:00
場所：ふくふくプラザ 604室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
内容：『日本の科学者』 5月号＜特集＞測るを極める

6-3 『日本の科学者』 6月号 読書会

日時：2019年6月10日（月）14:00～17:00
場所：ふくふくプラザ 604室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
内容：『日本の科学者』 6月号＜特集＞18歳選挙権と「主権者教育」の諸問題